

Title	フランス17世紀末の学者と東洋旅行記
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.95-p.102
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80353
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Les Récits de voyage en Extrême-Orient et les savants français à la fin du XVII^e siècle

Fumiko AKAGI

Nous avons examiné dans cet article quelle place l'Extrême-Orient occupait dans la pensée des savants qui vivaient dans la dernière décade du XVII^e siècle.

Comme un monument de la science concernant l'Extrême-Orient à cette époque, nous avons tout d'abord la *Bibliothèque Orientale* de d'Herbelot, publiée en 1697 par le soin de Galland après la mort de l'auteur. Cependant ce dictionnaire n'étant fondé que sur les documents arabes, perses et turcs, on ne peut trouver d'article sur le Japon. Quant à la Chine, nous trouvons là encore que la connaissance en est très vague et souvent fausse. Nous l'avons prouvé par les *observations* écrites par le père Visdelou, missionnaire en chine. Ces *observations* nous font constater aussi que d'Herbelot s'appuyait uniquement sur les documents mahométans, tout en connaissant les récits de voyage en Chine.

Au contraire, ce sont les sciences naturelles comme la biologie et la géographie que l'Extrême-Orient intéressait le plus et c'est à elles que ces récits de voyage contribuaient le plus. Nous avons exposé des exemples pris dans le *Journal des Savants*. Nous avons pu conclure de là que dans l'intérêt des savants, l'Extrême-Orient occupait déjà une place assez considérable.

Deux sortes d'attitudes se dégagent ainsi vis-à-vis de ces pays. Quelques-uns, comme d'Herbelot, n'admettaient pas assez l'autorité aux relations de voyage pour qu'ils crussent pouvoir fonder une science solide sur elles. Quelques autres, comme les géographes, étudiaient ces relations de voyage avec une grande curiosité et sans préjugé pour enrichir leur connaissance.

En tous cas, quelles que fussent leurs attitudes, tous les savants avaient toujours l'occasion de se procurer une connaissance quelconque sur ces pays, s'ils ne voulaient pas fermer les yeux volontairement. Car le *Journal des Savants* présentait des extraits très détaillés des récits de voyage presque toutes les fois qu'ils étaient publiés.

フランス 17 世紀末の 学者と東洋旅行記

赤 木 富美子

Bayle や Fontenelle, Fénelon など17世紀末の知的代表ともいべき人々が、どのように東洋を理解し、この未知の世界の異種の考え方、生き方にどう反応したかを先に調べたのであるが¹⁾、その背景としては、一般に17世紀フランスにおいて、どの程度、東洋が知られていたかを多少調べ、これらの知識の源泉として、旅行記が、思いがけず大きな役割を果たしているのを見た。東洋旅行記は、想像以上の愛読者をもっていたらしく、中には7回も版を重ねたものもある²⁾。このように一般の人々が、旅行記をどういう風に読み、どう活用したかを知ることは、Bayle などの特別すぐれた好奇心や反応を真に評価するためにも、必要なことにちがいない。大著述家たちがつて、一般の人々は、書きのこしたものもなく、その感想を調べることは大変困難なので、そのごく一部の手がかりとして、当時の学者たちの反応の一端を探ってみたいと思う。

17世紀フランスの東洋学の権威と云えば、まず d'Herbelot の *Bibliothèque Orientale* をとりあげなければならないだろう。この辞書は、d'Herbelot の没後 (1695年)、その後継者 Galland によって1697年上梓された。Galland はその序文の中で、この辞書が、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語によってかかれた資料にもとずいて作成されたものであることを、明記している。その中に、インド (17世紀では、南洋の島々から中国、日本もここに含まれた) に関する項目を求めてみると、Cの部に中国に関して13語 (例、Cambalu : Cathai の首都, Pekin の旧名, Caramara : 中国の王, など)、Fの部に2語 (例、Fagour : 中国の王の称号, 綽名, Fenek : Cathai と Igur の天文学者達)、Dの部に7語 (例、Decan : インドの町など) といった風に、すこしは見出せる。しかし、アラビア、ペルシャ、トルコ語による資料のみにたよった故か、当時の旅行記では、頻繁に用いられた日本その他の諸国の名は見出せないのである。辛うじて、Sined 又は Send (東インドの海) と云った記述が見附かる程度である。割合に多い中国に関する記述にしても、その多くは、あいまいで、まちがっていることがしばしばである。上の例をとってみても、中国の王は Fagour とは呼ばれないし、また北京の代りに Cambalu をおくのは、北京という名がすでに広く知られていた当時としては奇妙なことである。そういうことから、われわれは、この著者が資料として中国や日本に関する旅行記を一切使用しなかったと推測することが出来る。更に、中国に宣教師として長く滞在した Visdelou 神父の著書、*Histoire de la Tartarie* を読むと、このことがはっきり証明されている。彼は、d'Herbelot の辞書の中に、中国に関する誤った記述を発見し、それを訂正するためにこの書をかいたのだと云っており、「マ

ホメット流の誇張と中国風の簡潔と、一体資料としてどちらがすぐれているか、読者に判断してもらいたい」と希望している。*Histoire de la Tartarie* は長い間公にされなかった。1780年になって、d'Herbelot の辞書の新版が出る時、始めて、Visdelou 神父の、中国に関する記述についての observations をそえて、*Bibliothèque Orientale ou dictionnaire universel...par messieurs C. Visdelou et A. Galand pour servir de supplément à celle de Monsieur d'Herbelot* として集録された。

この時そえられた observations を見ると、d'Herbelot は中国に関する記述を書く時も、アラビヤ、ペルシャ、トルコ語による資料のみに拠ったことは明らかなようにおもわれる。57にのぼる observations の中のいくつかを引用してみよう。

1) 辞書の中の Khathai と Khata の項には、次のような説明が見られる。「北方中国の名。最も古い時代から、常に中国の王達によって治められていたものであり、このことは、東洋人達³⁾の歴史が記載している。Khathai 王 Khacan がペルシャ王 Caikhofron に対し、トルキスタンの王 Afrisiab の兵に自分の兵を合流せしめた」。これについての Visdelou 神父の observation を見ると、「その東洋人というのは、真の歴史家というより、むしろ、小説家である。中国の昔の帝王達は、34年近くの間、決して中国から出たことはない」と批判している。

2) 辞書の中の Khanbalic 又は Khanbalek の説明：「わが歴史学者や地理学者が、Cambalu と呼んでいる町、大 Tartarie 国にあるとされているが、東洋人の歴史家や地理学者によると、これが中国の町だということは確実である。Ibn Said は、この町を東緯130度北緯35度25分とし、Albarair の表では東緯124度、北緯49度となっている」。

これについての observation：「一体どうして、北緯35度25分の Ibn Said の Khanbalig が、北緯49度の Albarair の表のそれと同じであるというようなことが、おこり得るのか？一体どうして、45度の北緯にある Albarair の表の Khanbalig が中国の中にあり得よう、中国はその最も北の部分でも42度をこえないのに。事実はこうなのだ。Khanbalig とは、帝王が滞在しているどの町にもあてはまる呼名なのだ。こちら風に云えば、宮廷という意味なのだ」。

Visdelou 神父は、これらの observation で、*Bibliothèque Orientale* の著者を否定するつもりはないことを明かにしている。「著者は、事実の保証をしていないし、常に本当のことを云っている。他人の嘘を伝えている時でさえ」⁴⁾ と、弁護し、ただ、著者がマホメット教徒達のまがった資料によったことだけを、訂正したのである。

と云ってもこのことは、d'Herbelot が、中国に関しての旅行記を一切知らなかったということとを意味しない。彼は、Fleury と共に Bossuet の側近であり、Fleury は、「東洋での若い聖職者に何を教えるべきかについて書かれた手紙⁵⁾」の著者である。この人は、Evêque de Metelopolis の求めに応じてこの手紙を書き、それは、Bossuet も目を通してはいるのだが、その中で中国に関する知識を示している。すなわち「凡ては初めての時は、勉強は大変難しい。私は、Martini 神父の概要で中国史を読んだ時、その経験がある」⁶⁾ と云っているのである。だから

d'Herbelot もこの学者サークルで、宣教師や、旅行者から齎られる東洋諸国の話をきく機会が多かった筈だと想像することが出来る。そののみか、彼の辞書そのものの中にも、証拠を見出すことが出来る。Namkink の項に、「Namkink の町は、中国の歴史家や報告が今日語っている Nanquin と同じものである」と説明しているのである。実を云えば、この説明自身はまちがいである。「Namkink は、Houan 洲の首都で、当時は Kai-forem-fou と呼ばれており、ヨーロッパで同名と呼ばれている町からはずっと遠い」と Visselou も指摘している。ただ、d'Herbelot が旅行の報告を読んでいたということは、このことから知られるのである。d'Herbelot はしかし、辞書の説明に当っては、マホメット教徒の資料の方を重視し、採択したと考えるべきである。

このように東洋学専門の学者は、近東の資料にたよりすぎ、中国や日本に関しても、旅行記を信頼することが少なかった。かえって、生物学や地理学など、自然科学の分野に、インド以東に関する旅行記が貢献しているのが見られる。例えば、1691年には、「Lyon の有名な医師」Jean B. Panthot 氏はその *Traité des dragons et des escarboucles* の中に、旅行記を引用している。「よく探求していない歴史家や自然学者は、こうした作り話や伝説で一杯になっているのだが、もっと事実に忠実に書いた旅行者達の権威が、われわれの目をさましてくれるのに役立っている。例えば、40年間、殆んど常に陸をとって6回もインド旅行をした Tavernier 氏は、非常にたくさんのわに以外、龍なんかに出会ったことはないということだ」。⁷⁾

また、科学学士院が、中国の地理について正しい知識を確立しようとした時、その土台にしたのも旅行者達の権威である。「1685年、中国へ出かける de Fontanay 神父と他の二三の Jésuites が、学士院の集会に来て、天文学上の幾つかの疑点について話し合った」。1699年、「これらの人々から様々な観察が学士院に送られて来て、「赤道で、暑さは昔信じられていた程、過度ではないことが、結論出来た」。また「東インドの Jésuite の宣教師達から「普通の地図は、支那王国を、ヨーロッパから、実際よりも50里遠くにおいていることをわからせる観測が、同学士院に送られて来ている」。⁸⁾

更に地理上の論争も、東洋旅行記にもとずいて行なわれた。1697年の5月3日付、*Journal des Savants* は、王の地理官 Samson 氏の手紙の抜萃を紹介しているが、その中で同氏は、皇太子の地理官で、同じく旅行記にもとずいたとする Fer 氏の地図をはげしく攻撃して、次のように云っている。「以上私が論じたことの証明を与え、私が非難している誤りの実際をお見せしましょう。Fer氏は、地図の中に印刷させた緒言で、自分のアジア地図が、最近出版された le Comte 神父の『支那王国の現状』の中にかかれていることと、多くの点で一致するように作り得たことは幸であると云っておられる。Le Comte 神父は Haynen 島や台湾、Levo-Tum 洲も含まない支那は、殆んど円であると確言している。神父の意見は この点で Semedo, Pantoye, Ruggieri, Martinius, Bouim, Kirker, Magalean 諸神父や、ついこの間、Couplet 神父によって持帰られた支那の地図の中にあることとも一致している。Fer氏は反対に、支那を縦長にかい

ておられる」。

ここに引用された著者達の中、Ruggieri は中国における宣教創立者の一人であり、1585年に中国に渡った人である。また Semedo は1613年に渡支し、「支那総史」の著者として有名である。Boymeは中国の植物動物の研究や、中国医学の研究で名高い。その著 *Flora Sinensis* は1656年に、*Briesve relation* は1654年に出版されている。Martinins は1643年から51年まで中国におり、その *Novus Atlas Sinensis* は中国に関する最初の地理書である。Kirker は宣教師ではないが、宣教師の報告に興味をもち、1623年中国で発掘された景教記念碑の研究を1667年公にしている。Magaillans は1640年から死ぬまで37年間も中国に滞在した人で、このように見てくるとこれらの引用された著者は何れもその知識を信用出来る人々である。この論文の著者がどんなに熱心にまた常に旅行報告や研究書をよんだかが推測出来る。

旅行記が学者達にも相当よまれていたと更に思えるのは、研究が直接関係のない場合にまで、例として中国や南洋諸国の話を引いていることである。例えば、1691年9月19日の *Journal des Savants* によると、M. Morhof は、「図書館をつくる動機と方法について説明した後、火事や、王侯の度をすごした野心によって起った、いくつかの破壊」について語った。彼はその例として、中国の皇帝 Xius が、前の皇帝達の記憶をなくするために、すべての本を焼いたという話をひいている。同様に1690年1月16日の *Journal des Savants* によると、Gilbert 神父という人が、機械のすばらしい効果について、中国皇帝の例を持出している。「その皇帝は、或るジェズイットの神父が献上した鳴り時計を、生きものと思ったのである。こういった種類の贈物は、宣教師達が野蛮人を捉え、信仰にひきつける釣針である」。

1695年出版された André Chevallier の「印刷の起源」⁹⁾ では、中国に早くから印刷術のあった事が、既に知られているのがわかる。それ故この著者もそれにふれずにすませることは出来なかったであろう。「或者達は、中国では印刷が紀元前三百年以上前から行なわれていると確言している。Couplet 神父は、西暦930年だとしている。しかし、中国の印刷術がどんなに早くからあろうと、それはヨーロッパのとは異うものである」。¹⁰⁾

中国の墨については、1698年の科学学士院の集会で話されており、魚のすみと、少量の牛の胆汁とから出来ていることが報告されている。また同国のニスについても話されている¹¹⁾。

中国以外の国のことでも、フィリピンというような名まで、註釈なしに述べられている。「彼はフィリピンに追放され、Donfuan の死後、そこから帰った」。¹²⁾ また、バタビヤは少し註釈をつけてのべられている。「オランダがインド諸島に保有している国全体の首都バタビヤ」。¹³⁾ という風に。

哲学や道徳の分野でも、東洋はまた学者達の興味をひいたらしい。1695年の7月25日の *Journal des Savants* は、「インド諸国（中国、インド、シャム、マラバール、仏印などの総称）」における今日の学者についての Burnet 氏の小論を紹介しているが、この著者も、「これら諸国を訪れた旅行者の報告によると」と旅行記に親しんでいることを示している。

1694年5月24日の *Journal des Savants* は、様々な民族の、至上善の概念について書かれた本を紹介し、「支那人は、至上の善を、悟性の働きと、自然の秩序にみちびかれた意志の働きとに依存せしめている。日本には、靈魂の不滅を認めない、いくつかの派があって、しかしいくつかの徳を有し、それにもとずいた教戒を与えている」と述べている。教会の厳格な教義にとらわれず、知識と、もっともよい生き方を求めるという点で、これらの学者の態度は Fontenelle や Bayle と同じ種類のものだといってよいであろう。

資料が乏しいので、ごく一部の風潮しかわからないわけであるが、とりあえず以上調べたことに一応の結論を出すすると、本格的に中国などが研究されるのは18世紀を持たなければならぬにしても、17世紀の学者達の間で旅行記は相当広く熱心によまれていたことがわかる。それも荒唐無稽の娯楽作品としてでなく、専門の研究に役立てるための資料として真剣な興味でよまれていることが推測出来た。しかし、旅行記に対する反応としては、明らかに異った二種の態度が見られる。その一つは、d'Herbelot の場合のように、旅行記を読んではいても、まだそれを、確実な学問をその上にたてる程には信用出来ないとして、中国などのことについても、近東の学者の間接的資料によるといったものである。これに反し、もう一つの新しい態度としては、地理学者達のように、積極的に旅行者の報告をとりあげ、論争の際の証明にまで持出しているといったものである。この両極の間に、専門の研究の証明に用いる程ではないが、充分の興味と信用を旅行記に与え、偏見なく知識をふやしてゆこうとする態度がある。怖らく大多数の学者がこれに属すると考えられよう。

いずれの場合にも、この人達は凡て、意図して目をふさぎさえしなければ、これらの東洋諸国について、何らかの知識を得る機会是非常に多かったのである。というのは、今調べたように、断片的に他の主題の論文の中に語られたものでさえ相当数にのぼる上に、*Journal des Savants* は、旅行記が出版される度に、その非常に詳しい抜粋を、その都度のせているからである。例えば、1690年から1700年までの例をひろってみると、

1692年7月7日：Martini 神父の「中国史」の要約、3頁

1691年4月3日と5月7日：de la Loubère シャム大使の「シャム王国について」要約8頁

1693年3月15日：或船乗りの手記「東インド旅行記」の要約4頁

1696年 ：Thévenot 氏編纂の「いろいろの面白い旅行記集」の紹介2頁

1697年1月28日：le Comte 神父の「支那帝国現状」の要約17頁

1698年6月2日：Bouvet 神父の「支那皇帝の史的肖像」の要約3頁

1700年8月23日：「Gio Ghirardini 殿によってなされた支那への旅」の要約3頁

といった具合である。

最後に、ここで研究の主な資料とした *Journal des Savants* が、当時の社会のどんな部分を代表し、どんな種類の新聞なのかを一瞥する必要があるだろう。フランスで初めての本格的政治報道新聞としては1631年創刊された *Gazette* があり、事件やスキャンダル中心のものとしては、

いろいろの小刊行物を統合して1672年 *Mercurie Galant* が生れているが、文筆の世界の批評を主とした新聞として始めて1665年、*Journal des Savants* は発刊された。発刊の際の主旨は「定った日に定期的に発刊し、本の新刊や再版を報らせ、その内容を紹介、学問の分野でなされたさまざまな発見を残しておく役をする。一言で云えば、「文芸界」に毎日おこったこと全てを集めたものとする」¹⁴⁾ ということであった。書物の紹介、批評がその主な役目であるから、どうしても編集者の考え方が反映される筈であるが、ここにとりあげた17世紀末(1690—1700)は、恰度、4代目の名編集者 Louis Cousin の時代である。彼は一時名声を失っていた *Journal des Savants* を権威あるものに復し、たまたま病気のため中止された Bayle の *Nouvelles de la République des Lettres* に代るものとして、フランスだけでなく、全ヨーロッパに多くの読者を獲得した。彼自身ギリシャ・ラテンの文学、歴史に親しみ、当時の博学の士の常として数学、自然科学も勉強した。紹介する新刊、再版の書の一切に殆んど一人で目をとおり、はかない名声を得たい作者や、利益のみを追求する出版業者がのぞむようなものでなく、真に「読者に提供する価値のある本をえらぶことに出来かぎりの熱意を傾け、その忠実な抜萃をつくり、時には一歩一歩著者の跡をたどり、全部の要約をつくった」。¹⁵⁾ 宗教上の *libre pensée* を奨励しないこと以外は、どんな本も偏見なく受入れるよう心がけ、特別賞めない場合でも、著者を常に尊敬して扱った。*Journal des Savants* で推薦されることが難しくなればなる程、それは作家達にとってのぞましいものとなり、ヨーロッパ中の学者、作家達が著書をおくって来た。こうして Cousin 時代の *Journal des Savants* は、各アカデミー、大学、各国のさまざまな学者達からなる博学社交界といったヨーロッパの知的エリートを代表するものとなった。「それは一つの権威となり、確立した伝統となった。著作家達は、そこに自分の名や作品が引かれることを希うようになった」。¹⁶⁾ かつて著作家達の試金石であった Salon の批評が力を失い、機智のやりとりにあけくれるようになると、Salon を追われた学問の世界は、アカデミーや大学に住み心地のいい避難所を求めているから、その代表である *Journal des Savants* に現われた東洋への関心は、少数とは云え、相当の権威をもったヨーロッパのすぐれた人達の反応を現わすものだと考えていいであろう。

註

- 1) 拙論 *Pierre Bayle et le récit de voyage en Extrême-Orient, Etudes de la langue et littérature françaises*, No. 1, 1962 及び「Fontenelle と Fénelon の東洋観」, *études françaises*, No. 4, 1964.
- 2) Louis le Comte, *Nouveaux mémoires sur l'état présent de la Chine*, 1696.
- 3) 17世紀に、この名でよばれたのは主として近東人であり、日本人、中国人達は *Indiens* に入っていた。
- 4) *Ibid.*, Avis au lecteur.
- 5) Fleury, *Lettre écrite sur ce qu'il fallait apprendre aux jeunes clercs d'Extrême-Orient*, Paris 1689.
- 6) *Ibid.*, P. 45.
- 7) *Journal des Savants*, le 4 août 1692, p. 359.
- 8) *Ibid.*, le 26 janvier, 1699.
- 9) *Origine de l'Imprimerie*.

- 10) *Journal des Savants*, le 11 avril 1695.
- 11) *Ibid.*, le 26 janvier 1699.
- 12) *Mémoires de la Cour d'Espagne* (1690), in *Journal des Savants*, le 29 Janvier 1691.
- 13) *Journal des Savants*, le 29 août 1695.
- 14) Morgan, *Histoire du Journal des Sçavans*, Paris, 1928, p. 19.
- 15) *Ibid.*, P. 205.
- 16) *Ibid.*, P. 215.